読むくすり箱

第117号
平成１３年８月
富山県病院薬剤師会
ＤＩ委員会

くすりの作用メカニズム

薬は、局所適用と全身適用の2つに大きくわけられます。

局所適用 ― 患部に直接用いることで、多くは外用剤です。

全身適用 ― 胃や腸の粘膜から吸収され、血液とともに全身の血管をめぐるもので、いわゆる飲み薬や解熱・鎮痛用の坐剤がこれにあたります。

薬 まず始めにうまく体内に吸収されなければなりません。
たとえば胃酸に弱い薬は、粉薬のようなムキ出しの状態ではなく腸に行ってから溶ける特別のカプセルに入れられたり、直腸の粘膜から取り込むために坐剤にされたりします。

効果を発揮させたいところまで過不足なく必要量が運ばれなければなりません。いいかえれば血液中の薬の濃度が適当だということで、肝臓で代謝されたりすることなどを計算して、薬の量が決められているのです。

○濃度が薄すぎた場合
当然のことながら効果が弱くなります。

○濃度が濃すぎた場合
効果が強くなるのではなく、身体のほかの部分に悪影響を及ぼすことがあります。

避けたい くすりの副作用

薬は、体内で働いたあと、なるべく早く体の外へ排出されるようさまざまな工夫がされています。しかし、全身の血液中をめぐる間に、患部以外のところに影響をおよぼし、副作用がおこることを完全に避けることはできません。

■ 副作用のあらわれ方には個人差があります。

■ アレルギー体質の人や、肝臓・腎臓の弱い人におこりやすい傾向があります。
また、性格や心理的なもの、体質などによって程度も違ってきます。

なるべく副作用を避けるためには、病状とともに体質などを医師に相談してから薬を処方してもらいましょう。また、薬局で買い求められる総合感冒剤のように何種類もの薬を組み合わせてあるものを飲む場合は、他の薬との併用は極力避けましょう。もし、常用の薬などがあって、どうしても併用しなければならない場合は、必ず医師や薬剤師に相談して下さい。

妊娠中は薬の作用が強まって副作用をおこしやすく、また胎児に影響が出ることもあるので必ず医師や薬剤師に相談をしましょう。

薬を服用したあとで、吐き気や食欲不振、じんましんなど皮膚に変化があらわれた場合には、その薬の服用を中止し、医師や薬剤師に相談してください。

薬には、
服用する時間や回数、用量などが決まっています。
これらの指示は、薬の効果をうまく発揮させ、
安全に薬を用いるためにたいへん重要ですので
指示を必ず守るようにしましょう。